

鷹巣誠一作 「わたしのお兄ちゃん」

高野恵 (ふてくされて) ただいま。

高野研二 お帰り。どうしたんだよ。随分荒れてるじゃないか。

恵 なんでもないわよ!

研二 「なんでもない」じゃないだろ。

恵 うるさいわね。お兄ちゃん、黙っててよ。

研二 なんだと?

恵 フンだ。

母 (オフ) 研二、何やってんのよ、また。

研二 だってさ、帰ってくるなりこれだもん。

母 (オフ) そういう年ごろなんだから、ほっときなさいよ。

ナレーション 高野恵は中学2年生。大学2年の兄の研二とは7つ違い。クリスチャンの兄には、軽口をたたきながらも、一目置いていたのですが、今日はちょっと違います。どうやら彼女にとって面白くないことがあったのは学校のように。

音楽 (ブリッジ)

先生 それじゃ、各班で材料をまとめてください。

恵 あ、いけない! 人参忘れちゃったわ。

クラスメート佳子 全く! 恵のドジは今日に始まったことじゃないんだから。いいわ、ほかの班からもらってくる。

恵 ごめんね。

佳子 いいわよ。じゃもらってくるから、その玉ねぎとお肉切っというて。

恵 うん、分かったわ。(モノローグ) やだわ。玉ねぎはいいけど、お肉なんて気持ち悪くて。あ〜あ、こんなことなら、家でもっと手伝いをしておくんだったわ。どうしよう。

佳子 恵! なんにもやってないじゃないの。何やってたのよ。

恵 あ、ごめん。ちょっと考え事してたの。

佳子 考え事? 冗談じゃないわよ、こんな時に。ほかの班なんて、もっと進んでるのよ。まったくノロマなんだから!

恵 何よ、そんな言い方しなくたっていいじゃないの。ただちょっとお肉が気持ち悪かっただけよ。

佳子 気持ち悪い? あんた、それでもお料理したことあるの?

恵 そりゃあるわよ。1度や2度は…。

佳子 1度や2度ですって? 何よそれ、お話にもなりやしない。あんたなんかレタスでもむいててよ。

恵 何よ、そんな言い方ないでしょ。

先生 こらこら、さっきから何やってるの、その班は。一番遅れてるわよ。

恵(モノローグ) フン! 何よ、佳子ったら自分が少しぐらい料理ができるからって、なにもあんな言い方しなくたっていいじゃない。もう絶交よ。よーし、わたしだって負けないんだから。今にきっと佳子を見返してやるから。

音楽 (場面転換のブリッジ)

ナレーション そして先ほどの穏やかならぬ帰宅とはなった次第。どうやら彼女、一大決心をしたようです。台所へ向かって走って行きました。

恵 お母さん、夕飯の支度まだ出でしょ。わたしにやらせて。

母 おやおや、さっきは怒ってたと思ったら、今度は手伝い？ 調理実習でドジを踏んだんでしょ。ほら、人参も忘れて。

恵 うるさいわね。早くやらせて。

母 はいはい。まあ雪でも降らないといいけどね。

恵 フン。何からやるの？

研二 母さん。雨降ってきたよ。洗濯物は？

母 ああ、さっき入れたわ。ありがとう。

研二 あれ、メグ…。ははあ、雨が降ってきたのはこのせいかな。

恵 うるさいわね。早くあっち行け！

研二 大変だ。明日まで生きてられるかな。

恵 お兄ちゃんになんか、食べさせないよ。

ナレーション こうして始まった前代未聞の彼女の手伝いは、1週間ほど続きました。

恵 母さん、今晚は何にする？

母 そうね、ハンバーグにでもしようかしら。ひき肉がないから、ちょっと買いに行ってくれる？

恵 はい。

母 早々、研二が「本を買いに行く」って言ってたから、ついでに乗せてってもらいなさい。

ナレーション こうして、2人は車で駅まで買い物に出かけました。

効果音 (喫茶店の中。BGM)

ナレーション それぞれの買い物を終えたあとで――。

研二 メグ、冷たいものでも飲んでいこうか。おごるよ。

恵 へえ、珍しい、お兄ちゃん。

研二 メグ、最近、佳子ちゃんどうしたんだ？ 前まではよく一緒に学校に行ってたのに。お前も全然彼女の話しないし、さては何かあったな？

ナレーション 恵はハッとしました。兄に当たり散らしてしまったあの日から、兄に悪いことをしたと思いつつ、言い出す勇気もなかったのです。気分を悪くしているだろうと思っていた兄が、自分のことを心配して入れくれたのです。なんだかほっとした思いで、恵は答えました。

恵 うん、ちょうど1週間前…。

研二 ああ、あの怒って帰ってきた時か。察するところ、ケンカだな。で、仲直りはしたのか？

恵 ううん。

研二 どうして？ あんなにいつも一緒にいたのに。

恵 だって佳子ったらひどいのよ。ちょっとぐらい料理ができるからって、人のことノロマ扱いするんだもん。

ナレーション 恵は今までだれにも言えないで悩んでいたこと。本当は仲直りがしたいけれど、うまく切り出せないでいたことなどを、せきを切ったように兄に全部話しました。

恵 ねえ、お兄ちゃんはこの経験したことないの？

研二 おれか？ そりゃあるさ。お前よりも7年も長く生きてるんだからな。そうだなあ、あれはまだ

教会へ行き始めたころだから、高校の 2 年くらいだったかなあ。バレーボールがあまり得意でなくてなあ。それでチームの中の上手なやつがいて、そいつがおれに向かってさ、「もうお前、ボールに触るな。隣のやつが取るから」って言われた時には、さすがに頭にきたよ。いっそこいつの弱みを握って、言い返してやろうかと、その日一日はそのことばかり考えていたよ。

恵                    へえー、お兄ちゃんでも…。

ナレーション      恵には、いつも明るくて、人の悪口など言わず、ちょっぴり煙たい存在だった兄のその言葉は意外でした。

研二                でもな、夜、聖書を読んでたら、こういうみ言葉があったんだ。つまりね——、

朗読                「何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。」(ペテロの手紙第一 4:8)

それからね、こういうのもあったよ——。

朗読                「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであって、のろってははいけません。」(ローマ人への手紙 12:14)

…ていうふうだね。そうやって聖書読んでたら、不思議なもんで、自分の心の中がよく見えてきた。自分の技術が未熟で、チームに迷惑かけたんだから、怒られるのは当たり前。奮起して頑張りゃいいんだ。それもしないで相手を恨んだり、憎んだりしてるのは、やっぱり自分中心の思い上がりなんだ、ってね。

恵                    ふーん。でもわたしにはちょっとピンとこないわね。特にさ、相手を祝福するなんてとてもできないわ。だって相手は言いたいことを言ったのよ。それに、実際にわたしだって傷ついたんだから。

研二                おや、それじゃメグが全然悪くないみたいじゃないか。

恵                    別にそういうわけじゃないわ。確かに悪かったのよ、わたしだって。人参忘れてたり、お肉を切るのがヤだったんだもの。たださあ、佳子のあの言い方が気に食わなかったのよ。乙女心が少なからずも傷ついたんだから。

研二                (笑う)“乙女心”か。でもな、そんなことで意地を張ってたらきりがないぞ。

恵                    じゃあどうしたらいいのよ。いまさら言い出すのも決まりが悪いし。

研二                そうだな。まずメグ自身が変わることだな。

恵                    わたし自身が変わるって…。どんなふうによ？

研二                具体的にどうしたらいいかはメグが自分で考えるんだ。ただね、大事なことは、“自分も誤りやすいただの人間だ。もし自分が彼女の立場だったら同じことを言ったかもしれない”と考えてごらん。どうだい、彼女に文句が言えなくなるだろ？ 聖句の中にね、「互いに一つ心になり、高ぶった思いを持たず、かえって身分の低い者に順応しなさい。自分こそ知者だなどと思っははいけません。」(ローマ人への手紙 12:16)という言葉があるんだ。

ナレーション      恵はその時、心のどこかに一筋の光を見たような気がしました。今まで自分が意地を張っていたのが恥ずかしいような気さえしてきたのです。

恵(モノローグ)    そうだわ。今までわたしは、自分で分かっているつもりでも、心のどこかでは、“わたしは悪くない。佳子のほうが悪いんだ”って思ってたのよ。でも本当は、やっぱりわたしが悪かったのよ。佳子、ごめんね。神様ごめんなさい。

研二                どうだ？ 少しは自分に素直になれたかい？

恵 うん。まだちょっぴり悔しいけど。だけどお兄ちゃんってすごいね。あんなスラスラ聖書の言葉出てくるんだもん。見直しちゃった。“わたしとはどっか違う”と思ってたけど、その違いの出どころはあれね。聖書なのね。

研二 まあね。面と向かってお前に言われると照れるな。だけど聖書はね、ほんとにすごいんだぞ。道徳的にいいこと書いてあるだけじゃなく、ほらさっき、「自分を変える」と言ったろ？ それは自分の力じゃゼツタイできないんだけど、聖書には、メグを変えてくれる神様の救いの道が書いてあるんだ。僕が神様を信じてから少しずつ変えられたようにね。どうだ、読んでみないか、聖書？

恵 うん。

ナレーション 恵は、本当に優しくそうな兄の目を見ながら、ためらわず、うなずいたのでした――。

<完>